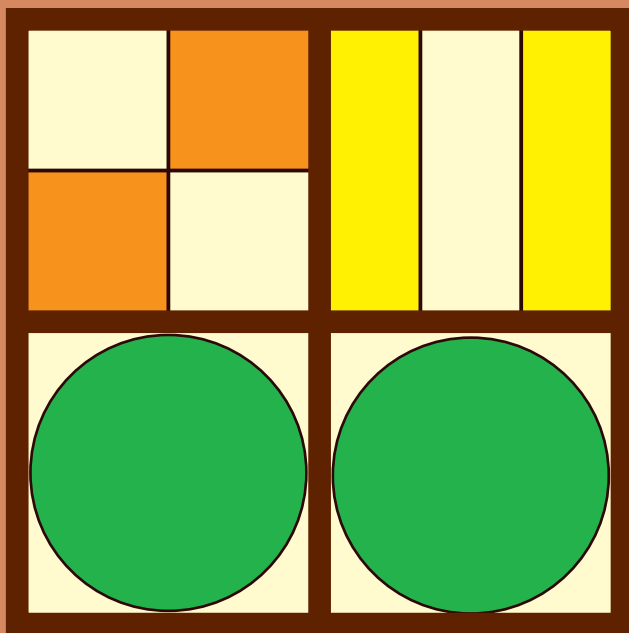


広島の木工職人

番匠谷 薫 編著



海青社

はじめに

私事で恐縮であるが、私の父方の祖祖母は安政年間生まれで、旧姓を小椋^{おぐら}と言う。小椋姓の人は滋賀県東近江市の小椋谷を発祥の地とする木地師(ろくろ師)であり、江戸時代は日本の山々を移動しながら、木材を自由に伐採してはろくろを使って椀などの木製食器を作っていたと言われている。木材切削の研究を長年行ってきた私は、種々の手作り木工品について、「どのような職人さんが、どのような刃物を使って、どのように作るのだろうか。木材は何を使っているのだろうか」など素朴なことが気になり始め、在職した広島大学と広島工業大学の学生と一緒に調査しては製作工程を分析し、特徴を明らかにしてきた。

このような調査を始めたのは、祖祖母に背中を押されてのことかも知れない。

子供の時に通った呉市内の小児科医院のすぐ隣に桶や樽を作る木工所があった。受診するまでの長い待ち時間の間、職人が桶や樽を作るのをじっと見ていた。小学校の遠足で宮島に行った時、職人が木材の表面に彫刻刀で宮島の鳥居などを彫るのをじっと見ていた。建築現場では職人が鉋^{かん}で木材を削ったり、玄能でくぎを打つのをじっと見ていた。子供ながら、職人のみごとな手さばきや仕事ぶりを見て、そして木工品や木造の家が次第にでき上がって行く姿を見て、感動したことを今でも覚えている。

今では、桶や樽を作る職人はどうやら広島県にはいないようである。いくら捜しても見つからない。宮島彫りの職人も次第に減少し、現在では数名と聞く。広島市安佐北区落合地区と安佐南区八木地区は、かつて桐下駄作りの産地であったが、現在では製作していない。落合・八木両地区の下駄作りを知っている若い人は恐らくいないであろう。この例が示すように、何かの原因によって職人が次第に姿を消すと、木工品も最後は消えてしまう。地域の文化がひとつ消えたようで残念である。考えられる最大の原因は、私達が使用する生活用品の多くが、和から洋へ変化したこと、材料が木材であったものが、次第に金属、プラスチックなどの他材料に置き換わったことである。加工に用いる良質な木材の入手難もあろう。これらの原因によって需要と供給が減少し、供給側の職人の減少、さらには後継者の不足と不在を招いたと考えられる。

これまで広島県内の職人が手作りする種々の製品に関して詳細に調査された報告は少ない。平成6年に広島県教育委員会が「広島県の諸職——諸職関係民俗文化財調査報告書——」を民俗学の立場からまとめている。同書は種々の材料から製作する生活用具の記録を残すことによって、後世に伝えることを目的としてま

とめられた製作概要である。同書が発行されてから四半世紀が経過した。残念であるが、記載された職人は故人になられた方が少なくない。本書は、木工品に限ってはであるが、平成の時代を生き現在製作活動をしておられる広島県内木工職人の名前を後世に伝えることを目的として、職人ごとに代表的な木工品の製作を木材加工学の立場から調べた結果をまとめたものである。調査後に故人になられた職人も記述した。

調査に当たり、広島県内の木工職人の氏名は種々の情報から時間をかけて調べた。調査はできるだけ多くの方を対象にしたつもりでいる。しかし、情報力不足が原因で結果的に対象者から外れてしまった職人も沢山おられると思う。調査対象はテーブルや椅子などの家具類を除いた、文具、玩具、装身具、携帯品、インテリア、食器、料理道具、茶道具の生活小物品を作る職人に限った。調査は前記のように私が在職した広島大学学校教育学部、広島工業大学環境学部で本課題に興味のある学生と一緒にいった。

本書は2部構成である。第Ⅰ部では、調査結果を基に職人の方々の了解を得て、木工品ごとに完成写真を示して職人を紹介し、職人の製作風景の写真を示しながら工程をできるだけ平易に執筆者が分担で解説した。第Ⅱ部では、木工品は地域ごとに特徴を有しているので、戸河内、廿日市、宮島、世羅、府中、松永の各地に古くからある木工品について、その製作の歴史と現状を各種文献と聞き取り調査の結果から私がまとめた。なお、第Ⅰ部の(故)道田精氏の桐下駄、(故)木上勇治氏のおおしゃくし、宮郷厚樹氏のめじしゃくし、横島文夫氏の戸河内刳物、羽山忠氏の木匙については、平成27年に海青社から出版された「図説 世界の木工具事典」で私が執筆した原稿に執筆者が加筆・修正して再掲した。写真撮影は殆ど私が担当した。フォーカスが合っていない写真が少なからずあると思う。ご容赦頂きたい。

本書が平成の時代を生きた広島県内木工職人の名前を後世に伝えることができ、さらに木工に興味を持っている方々の職人と製作する木工品への理解に僅かでも貢献することができれば、大きな喜びである。これまで時間をかけて調査をしてきたが、調査ができていない職人もおられる。今後もさらに調査を継続することができれば幸せである。

本書の出版に当たり、多様な中調査に協力して頂いた多くの木工職人の方々に深甚の謝意を表わすと共に、調査に積極的に参加し、原稿を執筆した広島大学学校教育学部と広島工業大学環境学部の卒業生、さらに、編集に終始助言と助力を頂いた海青社代表宮内 久氏と編集部の福井将人氏に厚くお礼を申し上げる。

最後に、本書を恩師(故)森 稔九州大学名誉教授に捧げるものである。

広島の木工職人

目次

はじめに.....	1
-----------	---

第 I 部 広島県内木工職人が作る木工品.....9

1 文 具

1.1 ボールペン.....	(故)中西 和司.....10
1.2 ボールペン.....	木原 博和.....12
1.3 万年筆.....	セーラー万年筆.....14
1.4 シャープペンシル.....	栗尾 敬治.....16
1.5 システム手帳カバー.....	亀井 一夫.....18
1.6 ペンケース.....	栗本 洋行・栗本 徳子.....20

2 玩 具

2.1 すごろく.....	豊田 真司・豊田 裕子.....22
2.2 トレイン.....	伊藤 健一.....24
2.3 バランス積み木.....	遠行工房.....26
2.4 ひねり独楽.....	清水 昌.....28
2.5 江戸独楽.....	藤登 康志.....30
2.6 達磨落とし.....	清水 昌.....32
2.7 けん玉.....	西村 保宣.....34
2.8 輪投げ.....	伊藤 健一.....36
2.9 乗り物.....	石田 武實.....38
2.10 カスタネット.....	遠行工房.....40
2.11 ままごとキッチン.....	由良隆太郎.....42
2.12 ミシン.....	伊藤 健一.....44

3 装身具

3.1 指輪.....	亀井 一夫.....46
3.2 プレスレッド.....	藤本 悟.....48
3.3 ペンダント.....	佐々木綱史.....50
3.4 桐下駄.....	(故)道田 精.....52

4 携帯品

4.1 スマホケース.....	佐々木綱史.....54
4.2 名刺入れ.....	亀井 一夫.....56
4.3 眼鏡ケース.....	佐々木綱史.....58
4.4 木織りバック.....	栗本 洋行・栗本 徳子.....60

4.5 和傘 ^{わがさ}	吉原 亮平.....	62
5 インテリア(照明)		
5.1 灯り ^{あか}	佛原 勝.....	64
5.2 灯り ^{あか}	森 隆.....	66
5.3 灯り ^{あか}	上畠 正敬・上畠 成道.....	68
5.4 灯り ^{あか}	高橋 雄二.....	70
6 インテリア(置物)		
6.1 掛け時計.....	木原 博和.....	72
6.2 一輪挿し.....	村井 昭夫.....	74
6.3 一輪挿し.....	榎本 幾雄.....	76
6.4 お雛様 ^{ひなさま}	もりの輝舎.....	78
6.5 木馬.....	ふれあい共同作業所くちわ.....	80
6.6 宮島彫り丸盆.....	稲垣 泰弘.....	82
6.7 大杓子 ^{おおしやくし}	(故)木上 勇治.....	84
6.8 バード・モビール.....	楨尾 良.....	86
7 インテリア(箱)		
7.1 桐箱 ^{きりばこ}	浦上桐工芸社.....	88
7.2 小物入れ.....	鈴木 徳俊.....	90
7.3 おもちゃ箱.....	中川大治郎.....	92
8 食器(和)		
8.1 椀 ^{わん}	藤澤 敏郎.....	94
8.2 椀 ^{わん}	齋藤 正明.....	96
8.3 飯杓子 ^{めしやくし}	宮郷 厚樹.....	98
8.4 八角箸 ^{はし}	榎本 幾雄.....	100
8.5 割り箸 ^{はし}	小川 友規.....	102
8.6 お玉杓子 ^{たましやくし}	横畠 文夫.....	104
8.7 丸盆.....	小松 昭雄.....	106
8.8 湯呑み ^{ゆの}	横畠智保子.....	108
8.9 木箱 ^{きばこ}	小川薄板工業.....	110
9 食器(洋)		
9.1 スプーン.....	松下 純一.....	112
9.2 サラダボール.....	横畠 裕希.....	114
9.3 エッグスタンド.....	藤本 悟.....	116

6 目 次

9.4 パン皿	藤本 悟・稲垣 泰弘	118
9.5 コップ	藤澤 敏郎	120
9.6 ワインコップ	藤澤 敏郎	122
10 料理道具		
10.1 寿司鉢 ^{すしばち}	(故)増谷芳五郎	124
11 茶道具		
11.1 棗 ^{なつめ}	小松 昭雄	126
11.2 木匙 ^{きさじ}	羽山 忠	128
11.3 一文字盆 ^{いちもんじ ぼん}	齋藤 正明	130
11.4 香合 ^{こうごう}	小松 昭雄	132
参考文献(第Ⅰ部)		134

第Ⅱ部 解 説	135
1. 戸河内剝物 ^{くりもの}	136
2. 戸河内挽物 ^{ひきもの}	137
3. 廿日市けん玉	138
4. 宮島杓子 ^{しゃくし}	140
5. 宮島ろくろ細工	141
6. 宮島彫り ^ぼ	143
7. 世羅経木帽子 ^{きょうぎ}	144
8. 府中桐箱	145
9. 松永下駄 ^{げ だ}	147
参考文献(第Ⅱ部)	150

索 引	151
-----	-----

※執筆者の氏名は、第Ⅰ部では各木工製品の説明ページ(偶数ページ)
の下に、第Ⅱ部では最終ページに括弧書きで記載している。

調査対象木工品製作所所在地マップ

広島市中区
江戸独楽, 30

広島市西区
灯り, 66

広島市安佐南区
ボールペン, 10
システム手帳カバー, 18
指輪, 46
ペンダント, 50
スマホケース, 54
名刺入れ, 56
眼鏡ケース, 58
椀, 96
一文字盆, 130

広島市安佐北区
トレイン, 24
輪投げ, 36
ミシン, 44
和傘, 62
灯り, 68

広島市佐伯区
バード・モビール, 86
おもちゃ箱, 92

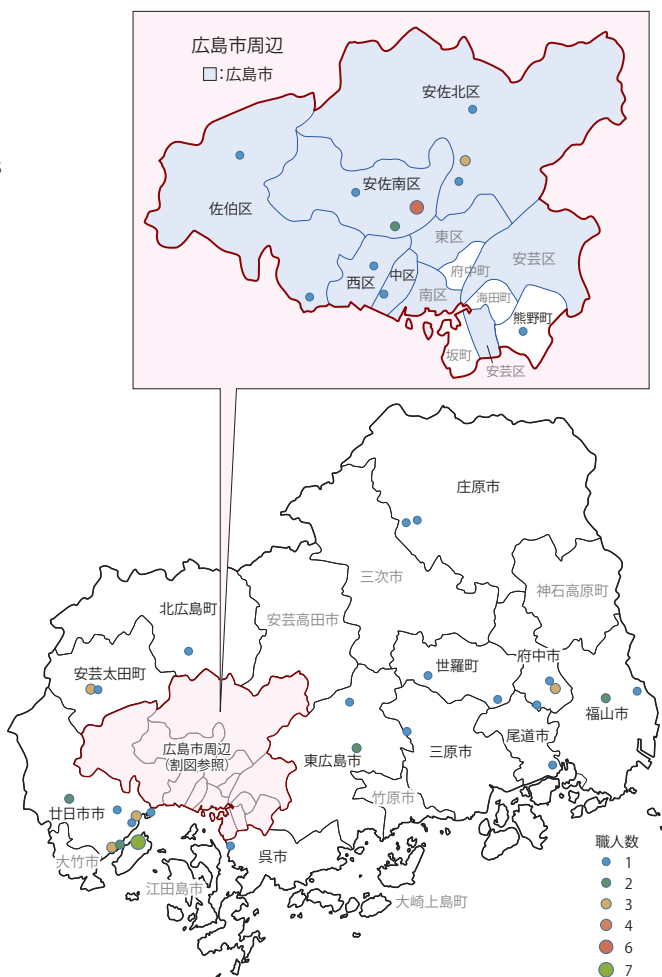
安芸郡熊野町
灯り, 70

廿日市市
ひねり独楽, 28
達磨落とし, 32
けん玉, 34
プレスレッド, 48
灯り, 64
一輪挿し, 76
宮島彫り丸盆, 82
大杓子, 84
小物入れ, 90
椀, 94
飯杓子, 98
八角箸, 100
丸盆, 106
エッグスタンド, 116
パン皿, 118
コップ, 120
ワインコップ, 122
棗, 126
木匙, 128
香合, 132

呉市
万年筆, 14

山県郡安芸太田町
お玉杓子, 104
湯呑み, 108
サラダボール, 114
寿司鉢, 124

山県郡北広島町
ままごとキッチン, 42



東広島市
ボールペン, 12
掛け時計, 72
一輪挿し, 74

尾道市
シャープペンシル, 16

三原市
お雛様, 78

世羅郡世羅町
割り箸, 102
木箱, 110

福山市
バランス積み木, 26
カステネット, 40
スプーン, 112

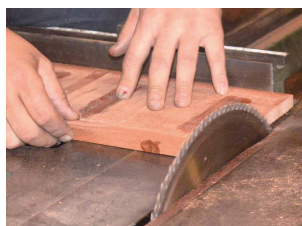
府中市
ペンケース, 20
すごろく, 22
桐下駄, 52
木織りバッグ, 60
桐箱, 88

庄原市
乗り物, 38
木馬, 80

第 I 部

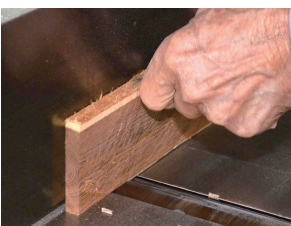
広島県内木工職人が作る木工品

(1) 切断



(丸のこ盤)

(2) 基準面加工



(手押しかな盤)

(3) 回転かな削り



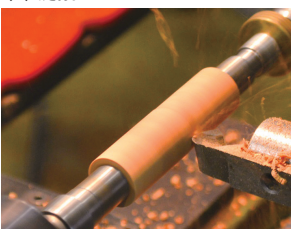
(自動かな盤)

(4) かな削り



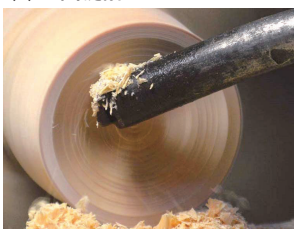
(かな)

(5) 旋削



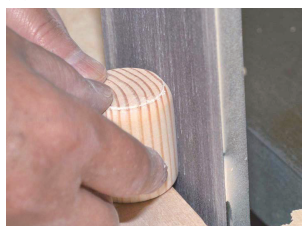
(旋盤)

(6) 正面旋削



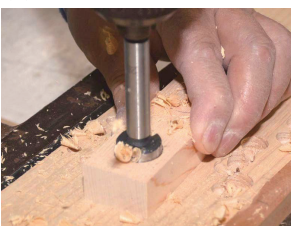
(ろくろ)

(7) 研削



(ベルトサンダ)

(8) 穴あけ



(ボール盤)

(9) 面取り



(かな)

木材の各種加工

このプレビューでは表示されないページがあります。

〈1 文具〉1.3 万年筆

セーラー万年筆(株)

呉市天応西条2-1-63



万年筆を製造する工場(会社)が呉市内にある。それは「セーラー万年筆」である。同社は、明治44年に阪田久五郎氏^{さかたきゅうごろう}がその前身である阪田製作所を呉市に創業し、初の国産万年筆(14金ペン)の製造を始めた。昭和7年にセーラー万年筆阪田製作所を設立し、昭和35年にセーラー万年筆に社名変更した。日本初のボールペン製造やカートリッジ式万年筆の特許取得など、日本を代表する歴史の長い筆記用具メーカーである。使用者が万年筆を握る部分である胴^{せう}は、プラスチック、真鍮^{しんちゅう}、ステンレス、銀が使われるが、天然木のものもある。同社は現在、トチノキ、カリン、タガヤサン、コクタン、クロガキ、智頭杉^{ちづ}を胴に使用する木軸万年筆を製作している。木軸作りと他の部品製作や組み立て作業は、多くの職人が分業で行っている。同社の万年筆のコクタンの木軸作りと組み立て作業の工程は次の通りである。

①材料取り：断面が21.8×21.8mmのコクタン角材を準備する。②胴の加工：コクタン角材を旋削して(図3①)、胴の材料として直径19mmの丸棒に仕上げる(②)。丸棒を回転させながら突っ切りバイトで両側を切断し、長さを51.3mmにする(③)。旋盤で丸棒の端面削りをし、長さを50.3mmにする(④)。③蓋の加工：蓋の材料の端面から穴をあけ(⑤)、内径の荒取りを行う。蓋に挿入するプラスチック製の蓋内環^{ふたないかん}の外形形状に合うようにNC旋盤で蓋の穴あけをして仕上げる(⑥⑦)。さらに、蓋を挿入して取り付けた固定具をNC旋盤のチャックに固定し、蓋の外周を所定の形状にテーパ削りする(⑧)。その後、#400の耐水ペーパーで磨く(⑨)。④胴組立：胴内環を胴に挿入して接着剤で固定し、胴リング、尾部リングを固定し、尾栓^{びせん}も接着剤で固定する(⑩)。⑤大先組立：首部である大先にペン先を固定する。⑥蓋組立：頭部内環にクリップ固定ねじを通してドライバを差し込み、上から蓋をかぶせる。スプリング座金^{てんかん}を上から入れ、クリップを載せる。天環をしめ込んで、蓋内環を接着する。蓋金輪と蓋栓を接着固定して(⑪)、完成(⑫)。(番匠谷薫)



セーラー万年筆(令和元年撮影)

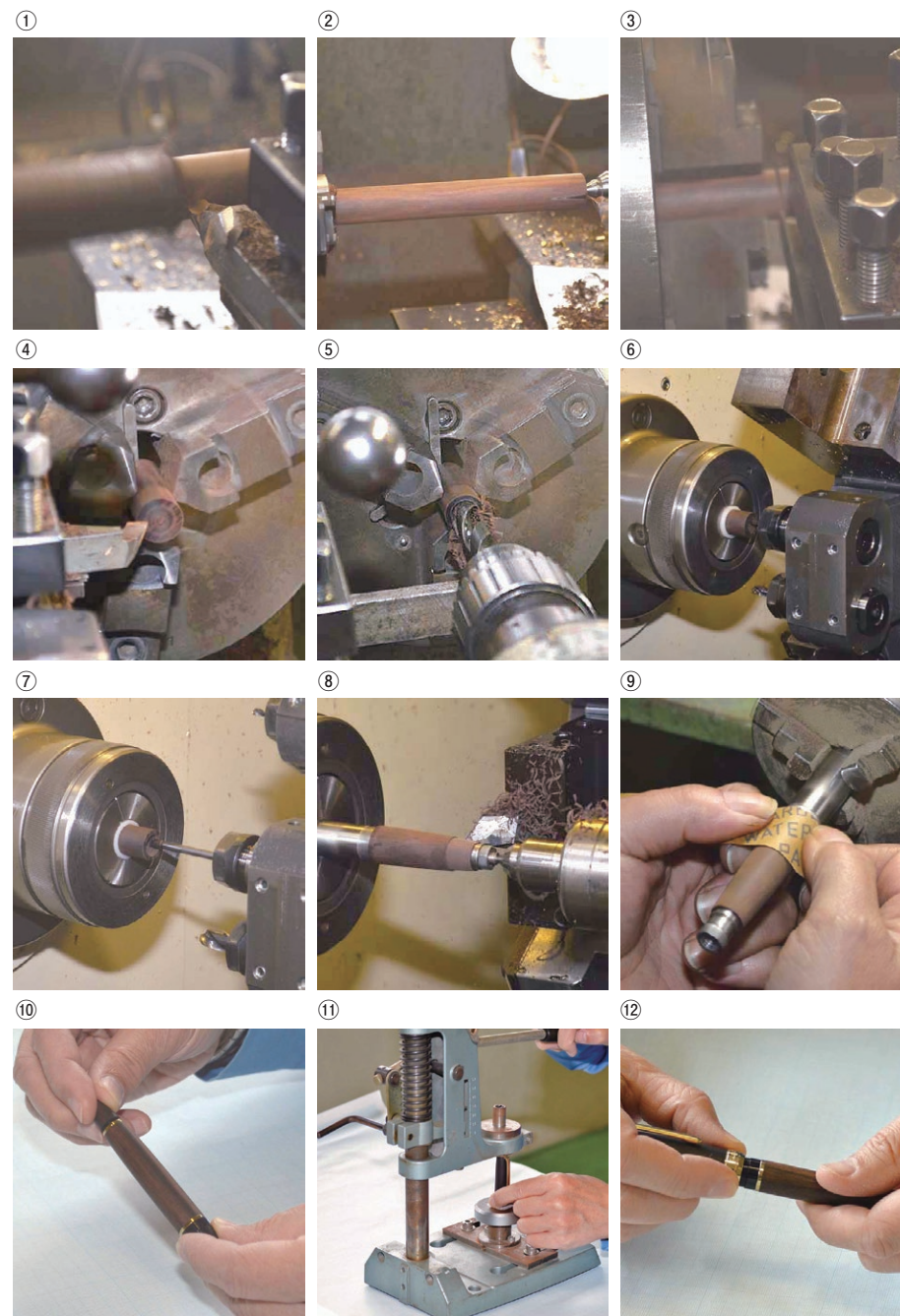


図3 万年筆の製作工程

このプレビューでは表示されないページがあります。

〈6 インテリア(置物)〉 6.7 大杓子

(故) 木上 勇治

廿日市市宮島町伊勢町 798

宮島杓子の長さが3尺5寸、4尺、4尺5寸、5尺、6尺を大杓子と言う。大杓子は必勝を祈願して選挙事務所によく飾られる。廿日市市宮島町の木上勇治氏(昭和4年生)は、大杓子を手作業で製作する職人であったが、平成27年に故人となった。木上氏の祖父と父の2代は飯杓子を製作していた。木上氏が平成20年に引退するまで半世紀以上で製作した大杓子は約2000本であり、そのうち6尺物は100本を超えと言う。(故)木上氏が製作した大杓子の製作工程は次の通りである。

①粗取り：製材された厚さ45mmのトチノキあるいはセンの天然乾燥材の板材に杓子の形をけがき、帯のこ盤で大まかに切断し、^そ反り台鉋の荒鉋で杓子の周囲を荒削りする。②乾燥：約1年間天然乾燥させる。③段付け：杓子の顔になる面を削って顔と柄に約10mmの段差を付ける。④顔削り：顔は中央部を^{くぼ}窪ませるので、さしがねを顔に当て窪みの左右対称性を確認しながら、反り台鉋で横削り、斜め削り、縦削りを行って顔を削る(図38①②③)。中央部での矢高が約10mmになるまで削る。⑤背落とし：背を丸くするためのけがきを行い(④)、電動鉋で背中上部と左右両面をけがき線まで削り落とし、反り台鉋で背中を丸く整える(⑤⑥⑦)。⑥柄削り：反り台鉋の荒鉋で柄を表側、裏側、側面の順に削り(⑧⑨)、柄の面取りを電動ルーターで行う。⑦首の面取り：^{こがたな}削り小刀で削ってから(⑩)、反り台鉋の仕上げ鉋で柄の面取りを行う(⑪)。⑧仕上げ：横型スピンドルサンダで顔と柄の側面研削を行い(⑫)、オービタルサンダで顔、背中、柄の全面研削を行う。首は紙やすりを指で当てて磨く。⑨焼き印：柄の表の上部に「宮島」の焼き印付けを行う。(山本 伸)



(故)木上勇治氏(平成8年撮影)



図38 大杓子の製作工程

このプレビューでは表示されないページがあります。

参考文献(第Ⅰ部)

- [1] 広島県教育委員会：「広島県の諸職——諸職関係民俗文化財調査報告書——」，広島県教育委員会 平成6年.
- [2] 「広島県文化百選 ③民芸・民具編」，中国新聞社 昭和59年.
- [3] 宮島伝統産業会館：「宮島の伝統工芸」，宮島伝統産業会館 昭和57年.
- [4] 「全国伝統的工芸品総覧 平成4年度版」，伝統的工芸品産業振興協会 平成5年.
- [5] 伝統的工芸品産業振興協会：「伝統的工芸品の本＜平成13年度＞」，同友館 平成13年.
- [6] 織江賢治編集：「すごい文房具ゴールデン」，KKベストセラーズ 平成25年.
- [7] 全日本独楽回しの会監修：「独楽」，文溪堂 平成15年.
- [8] MPO 法人日本けん玉協会監修：「けん玉」，文溪堂 平成15年.
- [9] 佐藤兎・山田葵：「家庭電気および機械」，朝倉書店 昭和43年.
- [10] 越田昇編集：「ふでばこ」15号，白鳳堂 平成20年.
- [11] すはらひろこ監修：「素敵な部屋づくりインテリア基本事典」，ナツメ社 平成19年.
- [12] 桑原勲編集：「デザイン照明 エイムック946」，えい出版社 平成16年.
- [13] 横田知枝：「木彫り入門」，日本文芸社 昭和57年.
- [14] 湯川順浩：「ワリバシ賛歌」，都市文化社 平成2年.
- [15] 一色八郎：「箸(はし)」，保育社 平成3年.
- [16] 佐藤敬一・鹿住貴之：「割り箸が地域と地球を救う」，創森社 平成19年.
- [17] 田中淳夫：「割り箸はもったいない？」，筑摩書房 平成19年.
- [18] 向井由起子・橋本慶子：「箸」，法政大学出版局 平成19年.
- [19] 中村源一：「ろくろと挽物技法」，槇書店 昭和56年.
- [20] 池田巖ほか：「茶道美術鑑賞辞典」，淡交社 昭和55年.
- [21] 小田栄一・中村弘子・池田瓢阿：「茶入・棗・茶杓」，主婦の友社 昭和63年.
- [22] 池田巖責任編集：「棗 替茶器」，淡交社 平成12年.
- [23] 池田巖責任編集：「茶杓」，淡交社 平成12年.
- [24] 池田巖責任編集：「香合」，淡交社 平成12年.

(番匠谷薫)

第Ⅱ部

解 説

(1) 戸河内割物



(2) 戸河内挽物



(3) 廿日市けん玉



(4) 宮島杓子



(5) 宮島ろくろ細工



(6) 宮島彫り



(7) 世羅経木帽子



(8) 府中桐箱



(9) 松永下駄



このプレビューでは表示されないページがあります。

広島県内の戸河内、廿日市、宮島、世羅、府中、松永の各地域では、歴史ある伝統的な木工品が多くある。第Ⅱ部では、戸河内刳物、戸河内挽物、廿日市けん玉、宮島杓子、宮島ろくろ細工、宮島彫り、世羅経木帽子、府中桐箱、松永下駄について、その歴史と現状を各種文献、資料、聞き取り調査結果からまとめた。

1. 戸河内^{くりもの}刳物

戸河内刳物を文献 [2] [3] [4]、横畠文夫氏への聞き取り調査結果からまとめると、次の通りである。

戸河内刳物の簡単な歴史と横畠文夫氏のお玉杓子(汁杓子)の製作工程は、第Ⅰ章の8.6に示した通りである。お玉杓子は宮島の藤屋大助氏が江戸時代の安政年間に創始したと伝えられ、福田李吉氏が大正期に旧戸河内町に移住して、その製作技能を伝えたものである。

現在は横畠文夫氏一族がお玉杓子を製作している。横畠文夫氏の父は横畠佐六氏であり、福田李吉氏の弟子である。福田李吉氏の他の弟子は、黒田亀太郎氏、岡増市氏である。横畠佐六氏の弟子は息子の横畠文夫氏と沖段数香氏である。昭和12～13年頃は戸河内町内で1日に1500本削った。年間45万本の杓子が飛ぶように売れたと言う。戦時の統制経済に入って、金杓子が作れなくなり、木杓子の需要が激増した。昭和10年から7年間、島根県波佐地区に安い原木を求めた。戸河内から20名以上が山小屋をこしらえたり、泊まり込みで杓子を削ったと言う。昭和22年に戸河内杓子同業組合(組合長：横畠佐六氏)が設立された。組合員は27名である。最盛期の昭和25年頃には30名で製作していた。昭和27～28年プラスチックのお玉杓子が出て、木杓子が売れなくなった。昭和30年に入って、売れ行き不振によって転廃業が相次ぎ、戸河内杓子同業組合は自然消滅した。杓子削りから、枕木削り、木挽き、土方、木出しに転業した。その後お玉杓子を製作したのは、横畠佐六氏と富永兼三氏であり、現在は横畠文夫氏が横畠工芸で3



図63 横畠文夫氏のお玉杓子

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

ア 行

相欠き接ぎ	64
アカダモ	90
アカマツ	102
灯り	64, 66, 68, 70
浅丸刀	82
畦挽き鋸	130
アブラギ	144, 148
アフリカンマホガニー	18, 46, 50, 54, 56, 58
一文字盆	130
一輪挿し	74, 76
糸のこ加工	72, 78
糸のこ盤	12, 26, 40, 50, 52, 64, 80, 86
印刀	82
インパクトドライバ	68
印籠	88, 110
ウェンジ	86
ウォールナット	22, 24, 44, 60, 78
浮かし彫り	82
うずくり	52
打ち鉋	104
内丸のみ	112
裏仕上げ機	52
絵付けけん玉	140
エッグスタンド	116
エッジベルトサンダ	22, 46, 48, 50, 54, 56, 58, 110
江戸独楽	30
NC旋盤	14
エンジュ	76, 86, 100
オーク	22
大杓子	84, 140
オービタルサンダ	72, 84

カ 行

お玉杓子	104, 140
お雛様	78
帯のこ盤	12, 36, 38, 48, 52, 56, 72, 88, 94, 106, 108, 112, 128, 130
角のみ盤	108, 130
掛け時計	72
飾り面カッタ	56
カスタネット	40
割断	50, 66
かつら剥き	102
角剥ぎ	52
ガラ回し	28, 32
ガラ回し機	28
カリン	10
かんざし	90
カンナボー	30
木織りバック	60
木匙	128, 140
木匙師	128
基準面加工	26, 100
木槌	114
木彫り鑿	130
ギヤプーラ	50
ギャングリッパ	16
球面加工	34
経木真田	144, 145
曲線挽き	38, 40, 86
キリ	22, 52, 88, 110, 147
桐下駄	52
キリ集成材	110
キリ突き板合板	110
桐箱	88, 146
クリ	36, 78, 114
削り小刀	74, 84
削りのみ	104
クロガキ	48

このプレビューでは表示されないページがあります。



編著者紹介

番匠谷 薫 (ばんしょうや かおる)

昭和 25 年 3 月生まれ 農学博士(九州大学)
広島工業大学環境学部教授
(元)広島大学大学院教育学研究科教授
広島大学名誉教授

専門分野

木材切削加工

主な著作・論文

(共編著) 図説 世界の木工具事典, 海青社, 平成 27 年
(共編著) 木材加工用語事典, 海青社, 平成 25 年
(共編著) 木材科学講座 6 切削加工 第 2 版, 海青社, 平成 19 年
(共編著) ものづくり 木のおもしろ実験, 海青社, 平成 17 年

ほか

Woodworkers in Hiroshima

edited by BANSHOYA Kaoru

ひろしまのもっこうしょくにん

広島の木工職人



本書のHP

発行日: 2020年3月21日 初版第1刷

定価: カバーに表示してあります

編著者: 番匠谷 薫

発行者: 宮内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

© BANSHOYA Kaoru, 2020.

ISBN978-4-86099-366-5 C0072 Printed in JAPAN. 印刷・製本: 亜細亜印刷株式会社

落丁・乱丁の場合は弊社までご連絡ください。送料弊社負担にてお取り替えいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも
著作権法違反です。